

高等学校における漢文教育の再検討（四編）

Reexamination how to teach Chinese classical literature and
philosophy to high school students (4)

安 東 俊 六

一 はじめに

現行の「高等学校学習指導要領」(以下「学習指導要領」と略称する)は、平成11年3月29日に改訂され、平成15年度から年次進行で実施されている。この「学習指導要領」においては、必修科目が「国語表現Ⅰ」及び「国語総合」の2科目となり、これによって漢文に関しては、「古典」及び「古典講読」で漢文を選択しない限り、「国語総合」における漢文の学習が高等学校における唯一の漢文の学習となることになった。その意味でも、「国語総合」における漢文の学習は、今まで以上に慎重かつ綿密な指導が求められるようになったと言える。

小論は、「国語総合」漢文編・漢文入門について検討した拙論「高等学校における漢文教育の再検討(続)」(注1)、「国語総合」漢文編・思想教材について検討した「高等学校における漢文教育の再検討(三編)」(注2)に続いて、「国語総合」漢文編の文学教材について検討を加えてみたいと思う。

二 「国語総合」の思想の教材

ここで教科書出版各社の「国語総合」の文学教材をみてみよう。

教育出版

『国語総合』

唐詩 九首

四季の歌

春暁 山亭夏日 山行 江雪

自然と人生

竹里館 涼州詞 早發城帝城 春望 香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁

漢文コラム3 漢詩のきまり

桐原書店

『探求 国語総合』(古典編)

2 詩文

五言絶句

登鶴鵲楼 王之涣

秋夜寄丘二十二員外 韋応物

峨眉山月歌 李 白

送元二使安西 王 維

楓橋夜泊 張 継

涼州詞 王 翰

五言律詩

登岳陽楼 杜 甫

送友人 李 白

八月十五日夜，禁中独直，对月憶元九 白居易

文章

雑説

韓愈

三省堂

『高等学校 国語総合』(古典編)

漢詩

漢詩八首	春曉	孟浩然	
	登鶴鵲楼	王之渙	
	静夜思	李 白	
	送元二使安西	王 維	
	江南春	杜 牧	
	涼州詞	王 翰	
	登岳陽楼	杜 甫	
	香炉峰下，新卜山居，草堂初成，偶題東壁		白居易

○漢詩の表現

小説	復活	干 宝
文章	雑説	韓 愈

第一学習社

『新編 国語総合』

漢詩の世界

唐詩の旅

黄河と古都	登鶴鵲楼	王之渙
	春望	杜 甫
西域	涼州詞	王 翰
	送元二使安西	王 維
長江と名山	黄鶴楼送孟浩然之広陵	李 白
	香炉峰下新卜山居	
	草堂初成偶題東壁	白居易

・漢詩のきまり

第一学習社

『高等学校 国語総合』

漢詩の鑑賞

唐詩の世界

自然	春曉	孟浩然
	江雪	柳宗元
	江南春	杜 牧
望郷	静夜思	李 白
	除夜作	高 適
	登高	杜 甫
別離	黄鶴楼送孟浩然之広陵	李 白
	送元二使安西	王 維
	春望	杜 甫

○漢詩のきまり

大修館書店

『新編 国語総合』

2 唐詩のしらべ

自然の歌 [春暁・江雪・山行]

友情のうた [秋夜寄丘二十二員外・送元二使安西・黄鶴楼送孟浩然之広陵]

憂愁のうた [登楽遊原・春望]

古典を読むために ③<漢詩について>

大修館書店

『国語総合』

三 唐代の詩文

絶句

絶句

杜 甫

登鶴鵲楼

王之涣

江雪

柳宗元

春夜洛城聞笛

李 白

送元二使安西

王 維

山行

杜 牧

律詩

春望

杜 甫

香炉峰下，新卜山居，草堂初成，偶題東壁 白居易

文章

雑説

韓 愈

古典を読むために 1 漢詩について

筑摩書房

『精選 国語総合』（古典編）

唐詩

春暁

孟浩然

秋風引

劉禹錫

江雪

柳宗元

山中問答

李 白

送別

杜 牧

送元二使安西

王 維

東京書籍

『新編 国語総合』

2 唐詩を味わう

唐詩 八首

[自然] 春暁（孟浩然） 参考 春のあかつき（前野直彬）

竹里館（王維） 参考 竹里館（佐藤春夫）

登鶴鵲楼（王之涣）

[友情] 送元二使安西（王維） 参考 旅ゆく友を送る（土岐善麿）

黄鶴楼送孟浩然之広陵（李白）

[人生] 静夜思（李白） 参考 静夜思（井伏鱒二）

涼州詞（王翰）

春望 (杜甫)

漢文のしるべ② 漢詩のきまり

東京書籍

『国語総合』(古典編)

二 唐代の詩文

唐詩	絶句	杜 甫
	登鶴鵲楼	王之涣
	江雪	柳宗元
	送元二使安西	王 維
	早発白帝城	李 白
	涼州詞	王 翰
	送友人	李 白
	春夜喜雨	杜 甫
	香炉峰下, 新卜山居, 草堂初成, 偶題東壁	白居易
	漢文学習のしおり 3	漢詩のきまり
	雑説	韓 愈

明治書院

『新編 国語総合』

3 唐詩

唐詩六首

(春暁 秋日 江南春 送元二使安西 早発白帝城 春望)

近体詩の決まり

明治書院

『精選 国語総合』

3 唐詩

唐詩九首(秋風引 江雪 勸酒 贈汪倫 清明 送元二使安西 楓橋夜泊
月夜 八月十五日夜 禁中独直 对月憶元九)

漢詩の手引き

上に見るとおり、各社の教科書に採る文学教材は圧倒的に詩であり、それも唐詩に限られている。僅かに採る教科書のある文章も、これが高校生向けの文学の教材であると言えるかどうかの議論は措くとして、韓愈の「雑説」がもっぱら採られている。唯一三省堂の『高等学校 国語総合』古典編の小説「復活」(干宝)が、時代の点からいっても古小説という点からいっても、異色中の異色の教材である。

三 「国語総合」の漢文の文学教材の問題点 (1)

まず問題点の第一は、教材の重複の問題である。既に「高等学校における漢文教育の再検討 (三編)」において、「国語総合」に採られた思想の教材が、中学校の思想の教材と重複していることを指摘したが、文学の教材においてもまったく同様に重複が見られる。

平成18年度から使われている中学校の五社の教科書の文学に関する教材を示せば、次のとおりである。

4 今に向かって

漢詩（漢文）

杜 甫 「春望」
 王 維 「送元二使安西」
 李 白 「静夜思」

教育出版 伝え合う言葉 中学国語3

読むく言葉を深める>

[古典] 詩歌の味わい

李 白 「黄鶴楼送孟浩然之広陵」
 杜 甫 「春望」

三省堂 現代の国語2

漢詩の世界

孟浩然 「春暁」
 李 白 「黄鶴楼送孟浩然之広陵」
 杜 甫 「春望」

東京書籍 新編 新しい国語3

4 古典を味わおう

漢詩二編

李 白 「黄鶴楼送孟浩然之広陵」
 杜 甫 「春望」

光村図書 国語2

4 古典に親しむ

漢詩の風景（石川忠久氏の文章）

孟浩然 「春暁」
 杜 甫 「絶句」
 李 白 「黄鶴楼送孟浩然之広陵」

中学校の教材と「国語総合」の教材とで重複しているのは、王維の「送元二使安西」、孟浩然の「春暁」、李白の「静夜思」・「黄鶴楼送孟浩然之広陵」、杜甫の「春望」・「絶句」である。今ここで殊更に断るまでもなく、王維の「送元二使安西」にせよ、孟浩然の「春暁」、李白の「静夜思」・「黄鶴楼送孟浩然之広陵」、杜甫の「春望」・「絶句」にせよ、重複しているとはいっても名作であることには間違いない。したがって文学作品を鑑賞するという立場からすれば、名作なのだから何度読んでもよいではないかという論は当然正論として成り立つ。しかし今ひとたび中学校の教材と高等学校の教材であるという観点からこれを捉え直すならば、同一の教材が重複しているということについては問題がないとはいえない。

いうまでもなく最大の理由は、「国語総合」における漢文教材に当てられる授業時数が、悠長に同一教材を重複してまで教えるほどにゆとりがないということである。中学校の漢文教材に配当される授業時数が極めて少ないことは、拙論「中学校における漢文教育の再検討」（正編）～（六編）において、既に繰り返し述べたとおりであって、そのことは「国語総合」における漢文教材に配当される授業時数においても、さして大差はない。したがって私はそうした状況を踏まえて、中学校・高等学校における一貫した教材の再配分が不可欠であると、主張するのである（注3）。

中学校の国語の教科書も高等学校の「国語総合」の教科書も、ともに教科書検定制度のもとに検定を通った教科書のはずである。そうであるにもかかわらず、何ゆえに漢文の教材だけがこのように顧

慮されることなく重複が罷り通っているのであろうか。奇異というほかはない。

四 「国語総合」の漢文の文学教材の問題点（2）

第二の問題点は、教材の内容に関する問題ではなく、「漢文における文学教材」という場合の「文学」の概念は、今日の高校生が一般的に持っている「文学」の概念とは違うということであり、その解説が教科書編纂の過程ではまったく、教育現場においても充分にはなされていないという問題である。このことは、「中学校における漢文教育の再検討」(六編)において既に一度述べたが、重要な問題であるのでここでも再度詳しく論じておきたい。

今日、高校生がごく普通に持っている「文学」の概念は、英語のliteratureと極めて近いものであろう。それはすなわち、明治以降日本が文学の先進国として欧米に学び、また欧米の文学を是として教育にも積極的に取り込んできたという歴史の結果である。

なるほど、明治以降 literature の訳語として「文学」が使われて定着してきたことは事実である。しかし literature の訳語として「文学」が使われたのは、literature という語が入ってきた当時の日本に literature の概念と合致する適切な言葉がなかったがためであって、便宜的に借りて使用されたものに過ぎない。それも意味が一部分重なっているというだけの理由から極めて安易に借用したものであって、結果からみるならば、決して賢明な借用の仕方であったとはいえない。

なぜならば、literature の訳語として「文学」が使われ始められた明治以降、元来の意味で用いる「文学」の語が日本で全く使われなくなってしまったというのであれば、問題は起きなかったであろう。しかし「文学」の語は元来の意味での使用も依然として行われ、加えて訳語としての新たな使用も並列して行われたがために、一語でありながら概念のずれを持つという致命的な欠陥をそのまま引きずることとなったのである。むしろいっそのこと、society などの一連の語と同様に、概念の合致する日本語がないものとして、当時に訳語を造語しておいてくれればこのような問題は起こらなかったといえる。しかし実際にはそうでなかった。それがためにここに問題とせねばならないような事態を生起せしめたのである。

最も問題を複雑にしているのは、教育の場の「国語」という一教科の中で、元来の意味で使用する「文学」と訳語としての意味で使用する「文学」とが、並列して使われてきたということである。改めていうまでもないことながら、教科の「国語」において元来の意味で使用する「文学」とは、漢文において用いる「文学」のことであり、訳語としての意味で使用する「文学」とは、現代文において用いる「文学」のことである。

因みに古文において用いる「文学」は、現状では現代文と同じ使い方となっている。しかしながら教育の場、教科「国語」での使い方としては、漢文と同じ元来の意味での使い方をすべきであろう。今日高等学校の教材に採られている『源氏物語』や『平家物語』などの作品は、書かれた当時はあくまでも「物語」であって、当時用いられていた「文学」の語の範疇には入らないものであった。そのことを着実に踏まえるならば、「国語」における古文では、「文学」という語を元来の意味で用いるべきである。そうっていないことに、私は奇異な感じすら受ける。

私の推測するところ、教科書編纂の過程や教育現場の指導において、漢文における「文学」という語が、「文学」という語の本来の使い方であるということの明確な解説がなされなくなったのは、教科「国語」において教材の大半を占める現代文が訳語としての「文学」を用いている上に、古文までもが訳語としての意味で用いるようになったがために、「文学」という語の本来の意味の方が忘れられてしまって、漢文における「文学」の意味も、現代文や古文と同一であると錯覚してしまったがためではなかろうか。

ところで、何ゆえに漢文における「文学」という語が、本来の使い方であるということの明確な解説がなされなくなったかという原因の追究は、今は一先ず措くとして、教科書において明確な解説が

なされていないという事実と、教育の現場においても明解な解説がなされていないという事実とは、憂慮すべき大きな問題であるといえる。

やはり教科書においても、現場の指導においても、漢文における「文学」の概念は、明確に解説されなければならない。そうでなければ高校生には、漢文において故事成語、思想、史伝、文学の四領域が何ゆえに取り上げられるのかという真の意味すら理解できないであろうし、まして思想で『論語』の数章を学んだくらいで、その後唐突に何ゆえに唐詩を学ぶことになるのかという関連性すらも、理解できないであろう。そもそも学ぶ者が、何ゆえにそれを学ぶのか、どのような関連性・必然性があるのかということも理解もせず、ただ学ばされることほど不幸なことはない。生徒に「学ぶ意欲を持って」と要求するからには、まずは教師が、生徒が関心を持ちうるように、教材の一つ一つについて学ぶべき必然性を説いて聞かせるべきであろう。漢文における文学教材の場合には、最も肝心の「文学」の概念そのものが高校生には明確に捉えられていないのである。したがってまず唐詩の一首一首を読み始める前に、「文学」の概念を明解に説いて聞かせなければならない。

五 「国語総合」の漢文の文学教材の問題点（3）

第3の問題点は、教材として採られている唐詩が必ずしも高校生の共感するものではないという点である。

上に見る如く、各社の教科書に採られている唐詩は、確かにいずれ劣らぬ名作ぞろいであり、中国においては勿論のこと、日本においても長く愛読されてきた作品ばかりである。たとえ教材としてであっても、文学作品を読むからには優れた作品を取り上げるのは当然のことであって、主眼として名作を教材に選ぶという選定の基本姿勢そのものには、何の問題もなかろう。しかし、視点を漢文の教材のみに限定せずに「国語総合」の教材全般に移してみると、漢文の文学教材は明らかに他と整合していないという違和感を強く抱く。とりわけ現代文の文学教材とは、著しい選定の基準の違いがあるように思われる。

なにも私は、現代文の選定の基準が優れた作品を採ることにはないなどと、否定的なことを言おうとしているのではない。むしろその逆で、現代文の場合には優れた作品を採るといった基準の他に、いま一つ高校生の年齢に適した内容の作品を採るといって、意義ある基準が設けられていると言いたいのである。このことは、中学校の「国語」の教材においても全く同様のことがいえる。中学校の文学教材でも現代文ではそうした意義ある配慮がなされているにも関わらず、漢文の場合は全くそうした配慮がなされていないのである。一教科内で教材選定の基準が一致していないなどということは、看過しがたい問題であろう。

ところで「国語総合」の古文の教材は、おおむね名作を採るということを唯一の選定の基本に見えているように見える。もっとも、「学習指導要領」が漢文と古文とを一括りにして古典としているのであるから、それも当然のことだと安易に片付けてしまえばそれまでのことだが、細部にまで目を配れば漢文と古文とを一律に論じることの方に無理があるといえる。古文は日本の古典を教材とするのであるから、古語の学習など困難な点があったとしても、「学習指導要領」のいう「我が国の文化や伝統について関心を」高めるという点において、名作を採るということを唯一の選定の基本としたとしても特におかしくはない。

しかし漢文の場合は、随分事情が異なってくる。たとえ教材に採られている作品が、かつての日本人が学び親しんで愛誦した作品であったとしても、元来中国の古典であって、今日の高校生には社会の基盤にある思想なり政治的経済的状況なりの十分な学習なくしては、理解しがたいものである。そうした学習が充分に行われてはいない今日の現状の下では、「国語総合」における文学教材に名作を採るということを、唯一の選定の基本とすることには無理がある。

紙幅の都合で、ここに「国語総合」の現代文の文学教材全てを取り上げることはできないが、漢文

教材の唐詩に対応するものとして、現代文の詩及び短歌・俳句の教材についてみてみよう。
例えば、

大修館書店『新編 国語総合』では、

6 詩歌との出会い

青春の詩歌 空と雲の詩歌 旅の詩歌

東京書籍『新編 国語総合』では、

7 青春のうた 短歌 俳句

のように、高校生の年齢に合わせて作品を選んだことを、「青春」の語を用いて明記している。また両教科書以外の教科書では、「青春」という語を使ってまでは明確に示していないものの、教材として採られている作品を見てみれば、高校生の年齢に配慮した選択であることは一目瞭然である。

一方漢文の文学教材はどうであるかというに、文学作品としては名作であっても、高校生の教材としては必ずしもふさわしくないものが含まれている。勿論いうまでもなく、これから取り上げて吟味を加えようとする作品が、すべての高校生に理解が及ばないとか、高校生では鑑賞するに十分な鑑賞眼をまだ持ち合わせていないなどと言おうとしているのではない。生まれ付いて優れた資質を持ち合わせている人はたとえ高校生であろうとも、それらの作品を十分に鑑賞しうるであろう。私の言わんとする主意は、あくまでも、ごく普通の資質と学力の持ち主の高校生にも履修が課せられている必修科目「国語総合」で、ごく普通の資質や学力では十分に鑑賞しえないような作品を採ることが、教材の選択としてふさわしいことか、ということである。

私が、ごく普通の資質や学力の持ち主である高校生では鑑賞しえないのではないかと危惧する理由の主なものは、次の二点である。第一点は、当時の社会の基盤にあった思想なり政治的経済的状况なりの学習が、中学校までの学習では到底不十分であるにもかかわらず、「国語総合」の教科書中にも理解の助けとなる解説らしい解説がなく、もっぱら担当する教師の解説に頼っているという点である。第二点は、果たしてかくも老成した詩境を高校生全般が解しうるのか、また解する必要があるのかという点である。

第一点の、もっぱら担当する教師の解説に頼っているという現状は、教育としては極めて危うく公平性妥当性に欠けている。現場の教師の知識不足を疑うわけではないが、教科書に解説らしい解説がなく、担当の教師にのみ解説が任されているということは、解説に繁簡の差が生じるという当然の結果を生む。これは決して好ましいことではない。しかも生徒は中学校で僅かに『論語』の数章と唐詩の数首を学んでいるに過ぎない。鑑賞しようにも鑑賞の素地すら培われてはいないのである。素地すら培われていないところに、いきなり中国文学の精華たる唐詩の名作を鑑賞せよと言われても、それは酷というものである。要求すること自体に無理がある。

ここで、一例として杜甫の「登高」詩をみてみよう。この詩は大歴元・二年 (765・767)、杜甫が55・56歳の夔州での作である。教材として採られた唐詩の場合、学習する生徒の年齢に比べて作者の年齢が著しく高い。この弊害についてはすでに指摘したので (注4)、敢えては繰り返さないが、55・56歳当時の杜甫を取り巻いていた状況は、今の高校生には縁遠いもので、しかし極めて深刻で、しかもその深刻な状況の十分な把握を抜きにしては、この詩の鑑賞は難しい。

風急天高猿嘯哀	風急に天高くして猿嘯き哀しみ
渚清沙白鳥飛廻	渚清く沙白くして鳥飛び廻る
無辺落木蕭蕭下	無辺の落木 蕭蕭として下り
不尽長江滾滾来	不尽の長江 滾滾として来たる

高校生でも、この前半の叙景が単なる叙景ではないことは、説明の要なく自然に理解するであろう。しかし、

万里悲秋常客作	万里悲秋 常に客と作り
百年多病独台登	百年多病 独り台に登る
艱難苦恨繁霜鬢	艱難 苦だ恨む 繁霜の鬢
潦倒新停濁酒杯	潦倒 新たに停む濁酒の杯

という後半の四句は、詳細な解説が高校生には必要で、それ無くしては鑑賞できない。

「多病」とは、当時の杜甫が多くの病に侵されていたことを詠ったものである。杜甫は43歳の頃から「肺気の疾」に侵されており、48歳からは瘡瘍が加わっていた。53歳の頃は足の痺れや頭痛がひどくなって、消渴(糖尿病)も患っている。また56歳の晩秋からは左耳も聞こえなくなり、当時の杜甫にとっては、薬餌と鍼の他に体を横たえて休養することも欠かせないものとなっていたのである。

「独り台に登る」の「独り」とは、こうした病苦にさいなまれる身を、孤独感が押し包んでいるということを詠っているのである。杜甫は既に成都の滞在中に高適や嚴武などの後ろ盾となってくれる貴顕の友人を失い、また自分自身は長男でありながら、四人の弟や一人の妹の面倒も充分にはみてやっていた。とりわけ末弟の豊に至ってはその正確な消息すら擱んでいなかったのである。元来重陽の節句は、家族友人と連れ立って登高し、茱萸を挿し菊花酒を酌み交わして楽しむべき日である。ところが当時の杜甫には、共に登って楽しむべき友人も兄弟も傍にはいない。その底の知れない深い孤独感を、この「独り」の語に表出しているのである。

氏族制社会の儒教の倫理が杜甫の時代に何如に重いものであったかは、中学校で『論語』の数章を学んだ程度では到底理解できない。一族に対する長男の責任の重さも、生徒を取り巻く今日の日本の社会ではあまりにもかけ離れたものとなっていて、杜甫の時代を想像することすら難しかり。当時は父親亡き後は、長男が戸主として先祖の祭りから全てを取り仕切り、弟妹の面倒を見るのも、いわば当然の長男の責務であった。しかし杜甫は動乱の中であったとはいえ、759年以降故郷に帰ってもおらず、当然先祖の祭りも執り行っていない。杜家の戸主として果たすべき重要な責務を、何一つ果たしていないのである。したがって、「絶句」詩で詠う「今春看みす又過ぐ 何れの日か是れ帰年」にも、戸主としての杜甫の強い慙愧の念が幾重にも裏打ちされているのである。

次に、第二点の果たしてかくも老成した詩境を高校生全般が解しうるのか、また解する必要があるのかという点について、検討してみよう。

既に例として「登高」詩を取り上げたので、ここでも「登高」詩で検討してみよう。この詩が杜甫の55・56歳頃に作られたものであることは先に述べたが、自分の父親よりも年上の詩人の心象の描写を、高校生が理解せねばならないものであろうか。先にも断ったように、たとえ高校生であっても老成していて理解の及ぶ人はいるであろう。しかしそれは極めて限られた一部の人たちであって、高校生全般というわけではなからう。

「艱難苦だ恨む繁霜の鬢 潦倒新たに停む濁酒の杯」の詩境は、杜甫の作詩の歳を過ぎた私には理解できてよさそうなものである。しかし生来酒を嗜まない私には、健康のためには愛する酒すら慎まなければならなくなってしまうと嘆く杜甫の本当の心のうちは、解らない。まして法的に飲酒を禁じられている高校生に、その気持ちが解ってもらっては困る。硬いことを言うようだが、この詩に限らず、詩中に酒の出てくる詩は、高校の教材としては採るべきではないであろう。

柳宗元の「江雪」詩も、高校生に鑑賞せよというには酷な詩境の詩ではなからうか。この詩の作詩の時期は定説というほどのものはないが、元和2年(807)の冬の作とする説がある。そうだとすれば、永貞の革新で連座して永州の司馬に左遷された後の作であり、革新を企図した順宗を前年の正月に失

い、最愛の母を五月に亡くした翌年であって、この詩の背後には、柳宗元の深い孤独の心象が幾重にも重なっているということになる。

またこの詩を元和2年の作と限定せずに、純粹に絵のごとき叙景詩だと解すれば、伝(宋)馬遠の「寒江独釣」図のように、後世南画の画題として愛された超俗的意境の詩と解される。

しかし両者いずれの解釈を取ってみても、高校生にこの詩境を味わえというのは酷である。高校生の年齢で柳宗元の深い孤独の心象など読み取れなくてよい。高校生がその年齢で、この詩の深い孤独感を読み取れるほどの体験を自ら持っているとするれば、それはむしろ不幸ですらある。また高校生の年齢で、この詩を超俗的意境の叙景詩として味わいうるならば、それに越したことはないけれども、それを高校生全般に求めるのは難しいであろう。

もしも唐詩の代表作として、一幅の絵となるような叙景詩を高校生に読ませたいのであれば、すでに採っている教科書もある杜牧の「山行」詩などのように、高校生でも十分に鑑賞可能な優れた叙景詩がいくらでもある。

このようにいくつかの限られた問題について検討を加えてみただけでも、「国語総合」の漢文の文学教材が、名作を採るということを唯一の基本姿勢にしていることには、問題が多い。やはり「国語総合」の教材の選択基準を、現代文も漢文も一律にするという意味からも、漢文は現代文に倣って、名作の中でも高校生の理解の枠を超えない年齢に応じた作品を選ぶということを、教材選択の基準に加えるべきであろう。

注1 『岐阜大学教育学部研究報告＝人文科学＝』第54巻1号，2005年10月，所収

注2 『岐阜大学国語国文』第32号，2005年12月，所収。

注3 「高等学校における漢文教育の再検討（続）」、『岐阜大学教育学部研究報告＝人文科学＝』第54巻1号，2005年10月，を参照願いたい。

注4 「中学校における漢文教育の再検討（六編）」、『岐阜大学教育学部研究報告＝人文科学＝』第53巻1号，2004年11月，を参照願いたい。